

巻 頭 言

*埼玉大学総合情報処理センター長 渡邊 啓行

21世紀の始めの100年は世界的に激動の時代になると予測する人々がいる。地球温暖化問題、人口爆発問題、東西冷戦後の民族問題、宗教対立問題、エネルギー問題、等々枚挙に暇がない程の難問が前世紀から引き継がれて解決を迫られているからである。日本にとっても、目下経済の回復と行財政改革のジレンマに悩んでいるのが実態である。2025年頃には日本の経済的地位が世界第五位に転落すると予測する経済学者がいる一方、産業のIT化により日本経済は大復活を遂げると予測する学者もいる。しかし、大部分の論調は、日本にとってのキーワードがIT化であるとするものである。このことは必然的に大学における情報処理システムの充実・同教育の充実が求められることを意味している。大学の役割を大きく分けると、新たな知の創造、その蓄積、知の発信の3つであろう。総合情報処理センターは各大学においてこの役割を支援する重要な拠点となっており、人員、予算ともに十分でないにも拘わらず重要な役割を担っている。

上述した行財政改革は日本にとって必然の義務であり、日本が真の意味で独立した国家になるための試金石である。国立大学においては独立行政法人化が目前に迫っているが、その対応についての議論は始まったばかりである。この問題に対する文部省の見解は、独立行政法人化は大学改革の一環として検討するものであり、国家公務員の定員削減とは切り離して検討を進める必要がある、と言うものである。日本の大学が世界の大学に互して世界的な研究・教育を推進する水準に到達しようとする大学改革の基本方針は、大学の研究者として当然の志向であるべきで、独立行政法人化を検討し進めるにあたり、このことを第一に念頭に置くべきものと考えられる。日本のキーワードがIT化にあると述べたが、それには常に新しいことを考え出し、研究においては独創性のより厳しい追及が必要になると考えられる。このような趨勢にあつて総合情報処理センターの重要性は今後ますます増してくると思われる。

現在の総合情報処理センターの中心は、スーパーコンピュータを始めとした研究支援のための施設である。情報処理機器は、1960年代の電子計算機の時代から、ミニコン、マイコン、パソコン、汎用大型電子計算機、ベクトル型スーパーコンピュータ、パラレル型スーパーコンピュータ、各種サーバ等々と発展してきた。システム処理では、汎用システムでジョブを処理する時代、単機能的にジョブを分散処理する時代、また再度集中処理する時代へと繰り返してきた。最新の情報処理機器がもつ記憶容量と情報処理速度は驚異的であり、その発展の速度もまた驚異的である。その結果、展開されるソフトウェアはますます多種多様に高度化され、このハードとソフトの発展における相乗効果は、コンピュータネットワークの利用範囲を高速大容量の計算からネットワークや電子メールに至るまで限りなく拡大している。これに伴いセンターへのユーザーからの要求は過大なものとなる一方である。また、電子メール等は、現在の電話回線（携帯電話）やテレビ回線、FAXや留守録などのように利用者が何の知識も持たなくても安定して利用できるようになり、利用者マナー教育や機密保護技術の発展が重要課題となっている。

総合情報処理センターを中心とする研究活動、開発活動が一層促進されることを期待して創刊されたのが「学術情報処理研究」であり、本年で4冊目となる。これらは情報処理研究の最先端の内容となつてきているものと思われる。大学の役割の中心的支援組織として総合情報処理センターが今後ますます情報処理研究を発展させることを期待したい。

*埼玉県浦和市下大久保255, hiroyuki@post.saitama-u.ac.jp